文化構想学科
アジア文化コース
Asian Culture

アジア文化コースについて

このコースでは、「地域」「共生」「比較」という3つのコンセプトを掲げて、アジアの文化的ダイナミズムをテーマとしています。日本、大阪をふくむ「アジア」とは、昔から文化、言語、宗教などにおいて多様性に富んだ地域です。そして現在のグローバルな文化交流によって、多種多様な課題と現状に対する理解が求められています。アジアに対する深い理解と共感、現代の文化状況への鋭い感性、文化にアプローチするための専門的な知識などをもとにしながら、それぞれの地域や社会の特性に応じた文化の活用を考えていきます。アジアについてなにも知らなくても、自分の生きている社会と歴史に好奇心を感じている学生、未来について考えたい学生に、オススメです！

先生の研究

「境界」「境界者」に着目して文芸文化やその交渉史について研究しています。専門は「国際日本研究」、かなり広い学問ジャンルです。もともと私の研究は、戦前の日本の国際派詩人の研究からはじまっています。境界性や「二重国籍」性をそなえる芸術文芸や一個人が、いかに各社会の時代風潮や国家イデオロギーや各国家の歴史観に左右されて評価されているか、芸術と社会組織の関係とはどういうものかに関心があります。ちなみに私の考えたい「境界」とは、国家間の「境界」、文化間の「境界」、芸術表現の中の「境界」、「翻訳」、人間の心や所在意識の中に見られる「境界」性など……多義的なものを想定しています。

准教授
堀（ほり） まどか 先生

授業紹介

来年度から開講される
アジア文化コースの授業について
ひと足先に聞いちゃいました！

多和田先生に聞いた アジア文化基礎論

アジアは文化的に多様な地域です。しかし西洋などと対比すると、アジアの諸文化にはアジア独自の共通するなにかがあるようにも思えます。さらに現在では、「現代的な」ライフスタイルの下で人々の暮らしが地域を問わず共通化しているという現実もあります。授業では、アジアの文化を様々な角度から考えるための視点を提供します。

松浦先生に聞いた アジア地域文化論演習

20世紀以降の中華圏の文化芸術を対象とした演習科目。詩、小説、演劇、美術などが、20世紀以降、地域文化とのかかわりの中でいかに再創造されていったのかを考察します。当時刊行されていた雑誌や映像資料など、生の資料を読み解きながら、そのダイナミズムに迫る予定です。受講生による報告を中心に皆で議論を深めてゆきたいと思います。

教員紹介 ※2019年度時点

多和田 裕司 教授 Hiroshi Tawada
文化人類学、東南アジア地域研究、現代社会と文化
共編著『イスラーム社会における世俗化、世俗主義、政教関係』（上智大学アジア文化研究所、2013）

松浦 恆雄 教授 Tsuneo Matsuura
19 世紀末以降の中国演劇、および近現代文学
共編『中国二〇世紀文学を学ぶ人のために』（世界思想社、2003）

堀 まどか 准教授 Madoka Hori
国際日本研究。比較文化。境界者の文学から、文学の境界をさぐる。
主著『「二重国籍」詩人　野口米次郎』（名古屋大学出版会、2012）

研究テーマ例

- ◆日中韓の近現代演劇のなかにみる女優の位置付け
- ◆東南アジアにおける教育と宗教
- ◆大阪をテーマにした戯曲（演劇シナリオ）にみる多文化共生

アジア文化コースにとって「物語」とは？

アジア文化コースから見た「物語」……。アジア文化コースのそれぞれの教員で、まったく違った観点が出てきそうなお題ですね。私自身が思うのは、「語る」「語らない」ということは、「文化」の生成や伝承過程で非常に重要な観点だという点です。みなさんは、「文学」や「語りもの」ということに対して、どのような印象をもっていますか？「歴史」というものは、より国家意識やナショナルアイデンティティに左右されがちなもので、「文学」や「物語」や「伝承」といったものは、個々人の、国家意識を離れたパーソナルな感情や思いや祈りの記録があつかわれるものだと思っているかもしれませんよね。でも、本当にそうなのかどうかを客観的に相対的に考えてみる必要があるかもしれません。実は、文学というものも、民族や国家の集団全体にかかわる思考法や倫理観、そして歴史的記憶をつくり出してきた装置でもあります。（文・堀先生）

「開高健（かいこうたけし）」芥川賞や日本文学大賞などを受賞している、日本を代表する作家です。

文化構想学科
文化資源コース
Cultural Resources

文化資源コースについて

2019年春に開設した最も新しい教室。コース名「文化資源」は、文化財、文化遺産といった文化的所産よりも遥かに広い範疇のモノ、コトを指しています。また、文化を社会の中で積極的に活用するための理論や実践について学びます。平たく言えば「文化資源」にはファインアート（美術作品）や文化財はもちろん、建物や街並み、道端のお地蔵様もスマートフォンのアプリも、観光地の顔出しパネルも含まれることになります。またこうしたモノだけでなく観光ガイドツアーやワークショップ、イベントなどのコトも含まれます。そんな文化資源コースの魅力は何と言っても研究対象の幅広さでしょう。極論すれば「何でもできる」のがコースの魅力。広い意味での芸術文化に幅広い関心を寄せる学生を求めています。

先生の研究

専門は日本美術史。幕末から明治期の絵画、特に浮世絵版画を勉強してきました。明治の浮世絵版画は美術史上の評価が低く、研究を始めた頃は「全く見向きもされないモノ」でしたが、それから早30年！　コツコツと調べ、その意味や価値を明らかにすべく論文を書き、数冊の単行書として刊行。文字化していくことで徐々に注目度が増し、大切に保管されるようになりました。美術作品は後世の誰かが価値を認め、これを研究しなければ、容易に失われていくものです。無くなっても不思議ではない様々なモノたちも、誠実な研究によって後世に残していける。美術史学は、残されたモノの価値を芸術学的な見地から明らかにし、歴史的に位置づけていく学問ですが、一方、「残していくため」の学問でもあるのです。

教授
菅原（すがわら） 真弓（まゆみ） 先生

授業紹介

来年度から開講される
文化資源コースの授業について
ひと足先に聞いちゃいました！

小田中先生に聞いた 舞台芸術文化論

演劇は文化の中でもすぐれて公共性（人々の相互作用）を前提とした芸術です。舞台は複数の人々（劇作家、演出家、俳優、裏方）によってつくられるだけでなく、それを見る観客がいて初めて成立します。この授業では古代ギリシャからシェイクスピアを経て、今日の世界で行われている演劇祭のいくつかを紹介しながら、演劇という文化が社会とどのようにかかわっているのかを考察します。

天野先生に聞いた 観光文化論

文化資源を演出し、人々にプレゼンテーションすることにより異文化交流を仕掛けていく具体的な現場の1つが「観光」です。この授業では、歴史や伝統など従来の観光の対象であった文化のみならず、グルメ、イベント、テーマパーク、アニメ、サブカルチャー、スマホゲームに至るまで、様々な文化資源を活用した最新の観光文化のあり方について探求します。

教員紹介 ※2019年度時点

小田中 章浩 教授 Akihiro Odanaka
演劇史、比較演劇、分野横断的な表象（たとえば虚構としての記憶喪失）の研究。
『モダンドラマの冒険』（和泉書院、2014）

天野 景太 准教授 Keita Amano
観光学（都市観光論・観光メディア研究・ニューツーリズム論）、都市社会文化論
共著『「観光まちづくり」再考』（古今書院、2016）

菅原 真弓 教授 Mayumi Sugawara
日本近世近代絵画史、文化資源学。特に複製媒体（主に版画などの印刷物）と社会背景に関する研究。
『月岡芳年伝　幕末明治のはざまに』（中央公論美術出版、2018、第 69 回芸術選奨文部科学大臣新人賞（評論等部門）受賞）

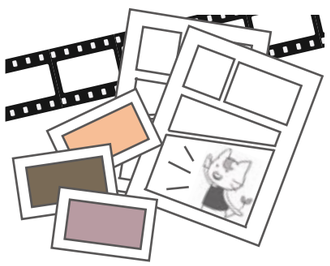
研究テーマ例

- ◆演劇の実践的な研究
- ◆比較演劇
- ◆美術史
- ◆ミュゼオロジー（博物館学）
- ◆観光学
- ◆音楽療法
- ◆臨床芸術

文化資源コースにとって「物語」とは？

たとえば「物語を見出すこと」。路傍の石ころだって、そこに価値を認めて位置づける（＝物語を見出す）ことで意味が生まれます。またたとえば「物語を紡ぐこと」。ありふれた場所でも、その土地の景観や歴史から物語を紡ぐことで観光地として魅力ある場所になります。あるいは「物語を分析すること」。上演されてきた戯曲を分析し、また比較することでその魅力は一層輝きを放ちます。さらには「物語を共に作ること」。音楽を媒介としたワークショップでは、即興性のある、その場でしか生まれない物語が共につくられていくことになります。

そして文化資源コースが形づくっていく「物語」は、私にはまだ全く見えていません。この物語の主役は学生の皆さん。私たちと共につくる新しい物語を、ぜひ皆さんが主導してください。（文・菅原先生）



大阪市立大学にある登録有形文化財の建物は何でしょう？